

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520016

研究課題名(和文) 多元主義としての根本的経験論—ジェイムズ=西田連関を基軸とした比較系譜学的研究—

研究課題名(英文) Radical Empiricism as Pluralism: Comparative Genealogical Approach with James=Nishida Relation as its Axis

研究代表者

嘉指 信雄 (KAZASHI, NOBUO)

神戸大学・その他の研究科・教授

研究者番号：20264921

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：最も大きな成果は、政治社会哲学にとっての多元主義的視座の重要性が、たとえば、明治期における中江兆民や、戦後日本の政治思想を代表する丸山眞男においても自覚的に主題化されていること、とりわけ、丸山眞男においては、ジェイムズやデューイに代表されるアメリカ・プラグマティズムの多元主義の意義の把握がその政治思想の中核に据えられていることを確認することができたことにある。

また、こうした現実の多元主義的構成をめぐる政治社会哲学的問題は、広島から福島原発事故後にいたる、いわゆる核被害評価をめぐる問題にも関わるものであり、多元主義的視点の意義を具体的問題場面においても明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：The most valuable result lies in our having been able to confirm the fact that the importance of the pluralist perspective for social and political philosophy was clearly thematized not only in Chomin Nakae of the Meiji period but also in Masao Maruyama, most representative political thinker of post-war Japan; especially in Maruyama, the significance of pluralism as represented by James and Dewey in American pragmatism was firmly grasped at in his understanding of the nature of political reality.

Furthermore, we called into question philosophical problems regarding the pluralist construction of social reality in such concrete and urgent problems as concerning the so-called evaluation of radiation damage.

研究分野：哲学

キーワード：多元主義 根本的経験論 近代日本思想

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の嘉指は、西田哲学の生成に大きな役割を果たしたジェームズ哲学の特質、特に、その「地平」概念の多面的な意義の考察を起点とし、研究に取り組んできた。こうした研究の発展として、2007-8 年度には、フルブライト客員研究員としてハーバード大学にて、「ジェームズ哲学の諸地平-プラグマティズム、現象学、多元主義の見地からの検討」をテーマとした研究に携わった。その間、多くの学会・研究会にも参加し、関心を共有する研究者たちと交流を深め、国際的連携を確かなものすることができた。また、2009 年にフルブライト講師として来日した S. Fesmire とは、神戸大学において共同演習「行為的自己と環境世界-プラグマティズムと京都学派」を英語で行い、共同研究の基礎を築くことができた。さらに、2010 年 8 月のジェームズ没後百年記念国際会議(アメリカ)や、2011 年 9 月の『善の研究』出版百年記念国際会議(ドイツ)では、本研究に直結するテーマで発表し、きわめて肯定的な反応を得ることができた。

2. 研究の目的

西田幾多郎は、ウィリアム・ジェームズの「純粹経験の哲学」、別名「根本的経験論」を自らの立場として出発したが、ジェームズが「現実の多元性」や「経験における断絶の契機」を重視する多元主義を標榜したのに対して、西田は「実在の根柢における無限の統一力」概念を基底にして、独自の弁証法的哲学を「場所の論理」として展開した。本研究は、ジェームズと西田の出会いの場となった「純粹経験」概念の内実のみならず、両者の哲学全体の基本的スタンスにおいて認められるこうした大きな違いの意味およびその社会哲学的・歴史哲学的な諸帰結を、アメリカやフランスにおける根本的経験論の継承・展開の有り様と対比しつつ問い直すことを目的とした。

3. 研究の方法

研究代表者・嘉指は、まず、今までの自らの関連業績を踏まえつつ、特に、アメリカ、日本、フランスにおける根本的経験論の展開の特質を概観・整理し、加えて、連携研究者や海外の研究協力者などと、適宜小規模でインフォーマルなワークショップを開催することにより、各自の関連研究の相互理解及び相互批判的検討を目指した。とりわけ、多元主義としての根本的経験論が持ちうる社会的意義に関しては、明治期における中江兆民から戦後の丸山眞男などにおける多元主義的思想の意義を確認し、さらに、ジェームズやプラグマティズムの多元的民主主義論と西田・京都学派の歴史哲学を対比考察し、さらに、非人道兵器の軍縮活動に国際 NGO として取り組んできている代表の実践的知見・関連業績も活かした具体的考察・展開を

目指した。

4. 研究成果

最も具体的な成果は、政治社会哲学における多元主義的視座の重要性が、たとえば、明治期における中江兆民や、戦後日本の政治思想を代表する丸山眞男において自覚的に主題化されていること、とりわけ、丸山眞男においては、ジェームズやデュエイに代表されるアメリカ・プラグマティズムの多元主義の意義の把握がその政治思想の中核に据えられていることが確認できたことであり、今後の研究の展開にとってきわめて大きな意義を有する。また、こうした現実の多元主義的構成をめぐる政治社会哲学的問題は、広島から福島原発事故後にいたる、核被害評価をめぐる問題の核心においても認められるところであり、多元主義的視座の重要性を具体的問題場面においても確認することができた。これらの成果は、たとえば、2014 年度の日本哲学会大会での外国語セッションにおいて発表したのみならず、いくつかの国際会議・研究会で公表し、おおむね大変高い評価を得ることができた。そのうちのいくつかはすでに日・英の論文集に収録されており、二、三のものは近刊である。とりわけ、学会発表 6) は、参加者より大変ポジティブな反応があり、学会発表 1) の基調講演につながったものであり、今年度中にヴェネチア大学出版局から刊行される論集に収録される予定である。こうした活動を通じて、共通の関心を抱く研究者との国際的ネットワークも格段と広がり、現在、さらなる共同研究に取り組んでいるところである。

さらに、「核と人類は共存できぬ」の言葉で知られる森瀧市郎(1901~1994)の活動と思想の意義を、京都学派の末裔のそれとして捉え直すことができた。嘉指は、現在、森瀧の『核絶対否定への歩み』(1994)の改訂増補版(2015 年夏刊行予定)の編集作業に取り組んでおり、担当予定の解説においては、京都帝大で学んだあと、広島(文理)大で教え、「英国倫理研究」(1953)で博士号を取った哲学者としての森瀧における「平和倫理」の形成過程を、西田や田辺から受けた薫陶、専門とした英国倫理研究、被爆体験などとの関係において概観し、次に、「核絶対否定」の思想の確立にとって決定的だったのは、海外の科学者との交流などを通じ、低レベル放射線のリスクを具体的に理解するに至ったことであることを明らかにする。最後に、放射線リスクをめぐる科学的・政治的言説の闘いこそが、福島原発事故後も含め、ポスト・ヒロシマの時代における生-政治の核心にあることを確認する。「共存できないということは、人類が核を否定するか、核が人類を否定するかよりほかないのであります。われわれは、あくまで核を否定して生き延びなければなりません」と断言する森瀧の「核絶対否定」の思想は、戦後同じように、「死の時代

としての核時代」について語った師・田辺の思想も及ばぬ切迫性・具体性が満ちたものとなっている。森瀧の思想のこうした捉え直しは、戦後 70 周年を迎える今日、哲学研究の枠も越えた、広い意義を認めることができよう。

今後の展望としては、本研究の問いを、京都学派、さらには近現代日本思想にまで広げて考察して行きたい。西田・田辺・西谷などの主要著作が英語等に翻訳されたこともあり、近代日本哲学に関する研究は、国際的にも国内的にも大きな展開を示しつつある。しかし、研究が多様化するに従い、とりわけ海外の若手研究者にとっては、全体像を展望することが難しくなっており、また、日本哲学の成果・意義も、より広い現代哲学の土俵においては十分に認知されているとは言いがたい。こうした認識のもとに、京都学派を中心としつつも、その前後・周辺も含めた近現代日本哲学における主要論点として「自覚」「美学」「平和」をめぐる問題群に照準をあて、それらの現代的意義及び可能性の中心を、脳科学、心理学、芸術学、社会学など、関連諸分野の最新の知見とも交差させる形で整理・明確化することにより、次世代の日本哲学教育・研究の、より建設的な国際的展開に寄与することを目指したい。

京都学派の最盛期は 1920-30 年代であり、さまざまな意味において時代的制約は大きく、とりわけ、時代状況とも密接に絡んだ「国家と戦争」の問題に関しては、関連社会科学の理論を考慮することなしには、単なる思想史的研究の域を抜け出すことが困難であると思われる。主要な二次的文献もバランス良く踏まえ、すでに提出されている批判も真正面から受け止め、かつ脳科学・心理学・社会学などの関連諸分野における最先端の知見とも照らし合わせた上で、日本哲学の現代的意義・可能性を明らかにすることを目指して行きたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- 1) SAITO, Naoko, Hilary Putnam, Naoko Saito and Paul Standish, “Interview with Hilary Putnam,” 査読無, *Journal of Philosophy of Education*, 2014, Vol.48, No.1, pp. 1-27.
- 2) SAITO, Naoko, “Exceeding Thought: Standing on tiptoe between the Private and the Public,” *Philosophy of Education*, 査読有, 2013, pp.108-116.
- 3) SAITO, Naoko, “Exceeding Thought: Standing on tiptoe between the Private and the Public,” *Philosophy of Education*, 査読有, 2013, pp.108-116.

〔学会発表〕(計 11 件)

- 1) KAZASHI, Nobuo, “Transmigration of Symbols in Hiroshima and Fukushima: Literary Engagements with the Ambiguity of Nature,” *Rethinking Nature in Contemporary Japan: Facing the Crisis*, 2015. 3.2, Venezia Ca Foscari Venice University, ヴェニス(イタリア)
- 2) KAZASHI, Nobuo, “Soseki’s Phenomenology of Hi-Ninjo and the Wake of Modern Japan,” at the Second Workshop for New Steps in Japanese Studies, 2014. 12. 15, 神戸大学(兵庫県)
- 3) KAZASHI, Nobuo, “American Junctures in Modern Japanese Thought: ”Unity and Plurality” in Nishida, Sōseki, and Maruyama,” *Philosophy as Translation: American Philosophy in Cross-Cultural Settings*, 2014. 11. 18, Helsinki Collegium for Advanced Studies, ヘルシンキ(フィンランド)
- 4) KAZASHI, Nobuo, “Bio-Politics over Radiation: From Hiroshima, Chernobyl to Fukushima,” *Science, Culture, Civilization: Philosophical Reflection on Eastern and Western Culture based on Science*, 2014. 10. 24, Kyunghee University, ソウル(韓国)
- 5) KAZASHI, Nobuo, “Philosophical Pluralism after Hiroshima: Perspectives for the 21st Century,” Invited talk, 2014. 10. 16, Oct.16, Hannover Philosophy Research Institute, ハノーヴァー(ドイツ)
- 6) KAZASHI, Nobuo, “The Ambiguity of Nature: “Transmigration of Symbols” in Hiroshima/Fukushima,” *Workshop “Varieties of ‘Mitate’: Fiction, Social Reality, Symbol”* 2014. 10. 13, Kobe University Brussels Office, ブリュッセル(ベルギー)
- 7) KAZASHI, Nobuo, “On Some Contradictions of Post-War Japan: A Critical Reflection Centering around Nuclear Issues,” 第 73 回日本哲学会大会外国語セッション “East-Asia and Transnational Ethics,” 2104. 6.29, 北海道大学(北海道)
- 8) KAZASHI, Nobuo, “Bio-Politics over the Invisible: A Reflection on the Victims of War and Radiation” at the 6th International Conference of P.E.A.CE (Phenomenology for East-Asian Circle), 2014. 5. 21, 香港中文大学(香港)
- 9) KAZASHI, Nobuo, “Chomin’s Translations of *Du Contrat Social* in Classical Chinese: On Contradictions between “Citizens” and “Subjects” at the 5th Conference of the Allied Philosophy and Applied Ethics in East Asia, 2014. 4. 27, 大連理工大学、大連(中華人民共和国)

- 10) KAZASHI, Nobuo, “Wakes of the Political in Modern Japanese Thought: Nishida, (Nakae), and Tanabe” in the Round Table: Cross-Currents and Vortexes through Translation: Dialogues between Japanese and Continental Philosophy,” the 13th World Congress of Philosophy, 2013.8. 4, アテネ(ギリシャ)
- 11) 嘉指信雄,「森瀧市郎『核絶対否定への歩み』(1994)再読 「放射線リスク」理解の変容をめぐる思想的・科学社会的考察に向けて」, 第 29 回現象学・社会科学会、2012.12.1、神戸大学(兵庫県)

〔図書〕(計 6 件)

- 1) 齋藤直子, 今井康雄, ポール・スタンディッシュ編、東京大学出版会、『翻訳のさなかにある社会正義』、2015 年 9 月刊行予定、全 256 頁 [嘉指担当部分: 「グローバル・リスク社会における正義—戦争と放射線被曝をめぐる生-政治—」 pp.177-191]
- 2) UEHARA, Mayuko, ed. *Philosopher la traduction* (翻訳を哲学する) 南山大学宗教文化研究所、2015 年 7 月刊行予定、全 220 頁 (予定) [嘉指担当部分: “Chomin, Translator of Rousseau’s *Du Contrat Social*: Self-Contradiction of the Nation-State, pp.29-59.]
- 3) 権田権二他編、『アメリカン・ヴァイオレンス 見える暴力・見えない暴力』、彩流社、2013 年 5 月、全 340 頁 [嘉指担当部分: 「ヒロシマから見たイラク戦争 否認され続ける DU (劣化ウラン) ヒバクシャたち」 pp.229-253]
- 4) 緒形康編『アジアディアスポラと近代植民地主義』、勉誠出版、2013 年 3 月、全 336 頁 [嘉指担当部分: 「田辺元『懺悔道としての哲学』における転回・理性批判の射程 ホルクハイマー/アドルノ『啓蒙の弁証法』との比較試論」 pp.263-289]
- 5) 嘉指信雄他編、『終わらないイラク戦争 フクシマから問い直す』、勉誠出版、2013 年 3 月、全 232 頁 [嘉指担当部分: “正義なくして平和なし” 劣化ウラン弾論争と禁止キャンペーンの展望」 pp.122-145]
- 6) SAITO, Naoko et al, ed. *Education and the Kyoto School of Philosophy: Pedagogy for Human Transformation*, Springer, 2012, 236 pages [嘉指担当部分: “Metamorphoses of Pure Experience: Buddhist, Enactive and Historical Turns in Nishida,” pp. 77-90.]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

嘉指 信雄 (KAZASHI, Nobuo)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号: 20264921

(2) 連携研究者

鈴木泉 (SUZUKI, Izumi)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号: 50235933

斎藤直子 (SAITO, Naoko)
京都大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 20334252

上原麻有子 (UEHARA, Mayuko)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 40465373

(2) 研究協力者

Steven Fesmire
グリーンマウンテン大学・教授
(アメリカ)

有坂陽子 (ARISAKA, Yoko)
ハノーヴァー哲学研究所・研究員
(ドイツ)